慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	戦場の社会史 : ビルマ戦線と拉孟守備隊1944年6月-9月(前編)
Sub Title	The Japanese Garrison of Ramo : Japanese campaigns in Yunnan and Western Burma from June to September 1944 : part 1
Author	遠藤, 美幸(Endo, Miyuki)
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	2009
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.102, No.3 (2009. 10) ,p.531(97)- 557(123)
JaLC DOI	10.14991/001.20091001-0097
Abstract	1944年9月7日, 中国雲南省の高黎貢山系の南端にある拉孟で, 約1300名の日本軍第56師団第113連隊主力の拉孟守備隊が全滅した。本稿は, 100日間の戦闘の後, 全滅に至った拉孟守備隊の戦闘について, 連合軍側の一次史料, 拉孟守兵の生存者のオーラル・ヒストリー(聞き取り)及び手記による実証的な方法を用いて, 「公刊戦史」の史実とは異なる拉孟守備隊全滅戦闘の実像を明らかにする。 On September 7th, 1944 in Ramo, located on the southern end of the Gaoligong mountain range at China's Yunnan Province, approximately 1,300 soldiers of the Garrison of Ramo, constituting the main force in the Japanese Army's 56th division 113th regiment, were totally annihilated. This study depicts the 100 days leading to the total destruction of the Garrison of Ramo, showing a different picture of the battle leading to the annihilation of the Garrison of Ramo from historical facts as described in "Koukan Senshi." To this end, this study uses an empirical method from primary sources from the Allied Army, oral history (interviews) with surviving Ramo guards and their notes.
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-20091001-0097

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

戦場の社会史―ビルマ戦線と拉孟守備隊 1944 年 6 月-9 月（前編）―
The Japanese Garrison of Ramo —Japanese Campaigns in Yunnan and Western Burma from June to September 1944 —Part 1

遠藤 美幸(Miyuki Endo)

1944 年 9 月 7 日，中国雲南省の高黎貢山系の南端にある拉孟で，約 1300 名の日本軍第 56 師団第 113 連隊主力の拉孟守備隊が全滅した。本稿は，100 日間の戦闘の後，全滅に至った拉孟守備隊の戦闘について，連合軍側の一次史料，拉孟守兵の生存者のオーラル・ヒストリー（聞き取り）及び手記による実証的な方法を用いて，「公刊戦史」の史実とは異なる拉孟守備隊全滅戦闘の実像を明らかにする。

Abstract

On September 7th, 1944 in Ramo, located on the southern end of the Gaoligong mountain range at China's Yunnan Province, approximately 1,300 soldiers of the Garrison of Ramo, constituting the main force in the Japanese Army's 56th division 113th regiment, were totally annihilated. This study depicts the 100 days leading to the total destruction of the Garrison of Ramo, showing a different picture of the battle leading to the annihilation of the Garrison of Ramo from historical facts as described in "Koukan Senshi." To this end, this study uses an empirical method from primary sources from the Allied Army, oral history (interviews) with surviving Ramo guards and their notes.

「三田学会雑誌」102 巻 3 号（2009 年 10 月）

戦場の社会史

——ビルマ戦線と拉孟（らもう）守備隊　1944 年 6 月–9 月——

（前編）

遠　藤　美　幸

（初稿受付 2009 年 7 月 14 日，
査読を経て掲載決定 2009 年 10 月 21 日）

要　　旨

1944 年 9 月 7 日，中国雲南省の高黎貢山系の南端にある拉孟で，約 1300 名の日本軍第 56 師団第 113 連隊主力の拉孟守備隊が全滅した。本稿は，100 日間の戦闘の後，全滅に至った拉孟守備隊の戦闘について，連合軍側の一次史料，拉孟守兵の生存者のオーラル・ヒストリー（聞き取り）及び手記による実証的な方法を用いて，「公刊戦史」の史実とは異なる拉孟守備隊全滅戦闘の実像を明らかにする。

キーワード

ビルマ戦線，拉孟守備隊，一次史料，オーラル・ヒストリー，公刊戦史，実証的方法

I. はじめに

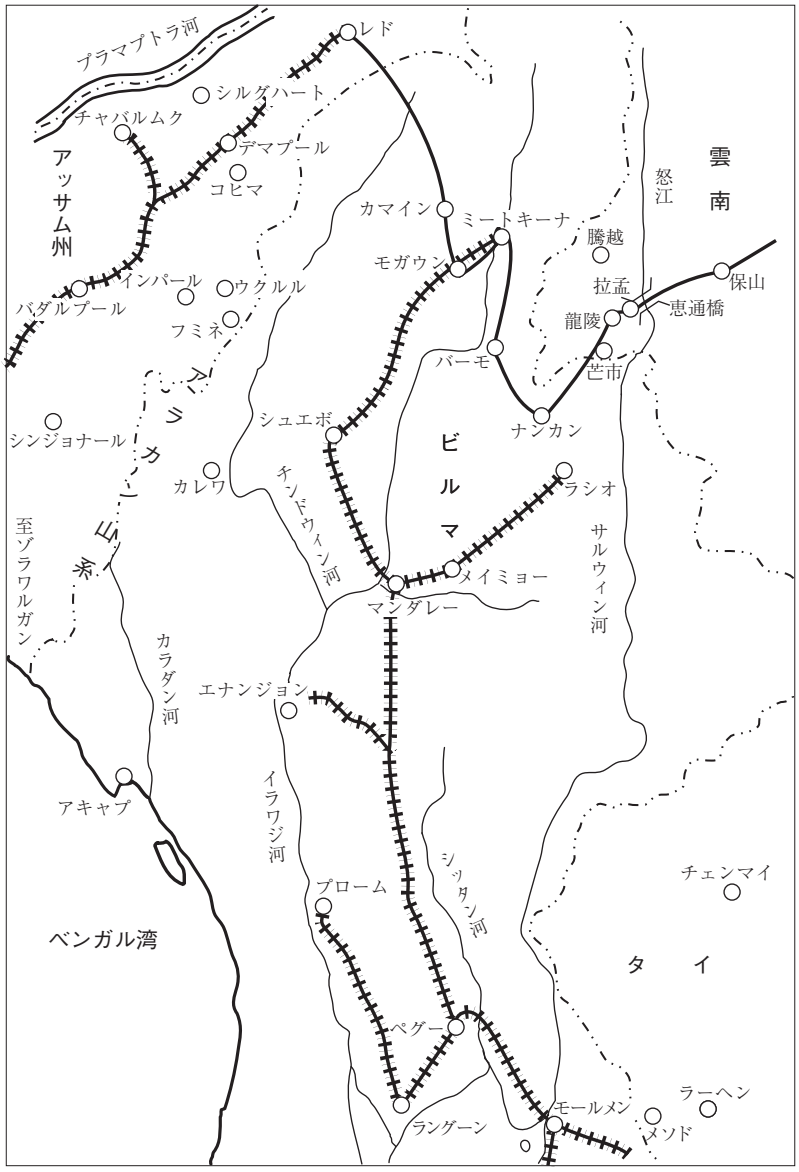
1. ビルマの戦況

1941 年 12 月のアジア・太平洋戦争開始以降，日本軍は東南アジアや中国大陸に対する南方作戦を開始した。日本軍の南方作戦の主な目的は，アジアにおける米英蘭等の南方の補給地および軍事的要衝地を占領確保し，同時に南方の石油資源等を獲得することにあった。しかし，南方作戦のなかでも，日本軍が策定していたビルマ進攻作戦には，資源要地の占領確保以外に別の狙いがあった。一つは，ビルマ工作の一環としてビルマ独立運動の志士らを扇動し，ビルマの「独立」を促し，英本国の支配から分断すること[(1)]，もう一つは，北ビルマから重慶の蔣介石政権を支援する連合軍の補給

---

(1)　1941 年 2 月に，鈴木敬司大佐は，自らを機関長とするビルマ工作機関（南機関）を設置。鈴木大佐の下で，アウン・サン，ネィ・ウィンらの 30 人のビルマの志士らはビルマ独立義勇軍を組織して日本軍と共にビルマ戦線を戦い，1943 年 8 月に，日本の工作でバー・モオ内閣が成立。その後，志士らは日本軍の軍政に反発し，1945 年 3 月に，一斉蜂起し抗日戦に踏み切る。日本占領下のビルマの独立運動の推移については，根本敬『アウン・サン―封印された独立ビルマの夢』（岩波書店，1996

図１　ビルマ要図



（出典）野口省己『回想ビルマ作戦』（光人社，1995 年）15 頁。

路を陸路で遮断することであった。これはいわゆる「ビルマルート」と呼ばれる「援蔣（えんしょう）ルート」であり，中国では「滇緬（てんめん）公路」と呼ばれた[2]。1942 年 3 月 8 日，日本軍はビルマの首都ラングーン（ヤンゴン）を占領し，さらに北進して 5 月上旬に雲南省の怒江の線まで進攻し，下旬にはビルマルートを遮断した。

年）110–134 頁を参照。

日本軍が地上ルートを遮断した直後，連合軍はインドと中国間の空のビルマルートである「ハンプ空輸」を開通したが，航空機輸送の物量には限界があるため，連合軍は一日も早い地上ルートの奪回を目指した[(3)]。1943 年 8 月，連合軍は指揮系統の統一のため東南アジア連合軍司令部を設置し，司令官に英海軍中将ルイス・マウントバッテン，副司令官に米軍中将ジョセフ・スティルウェルを任命した。さらに 8 月のケベック会談では，ルーズベルトとチャーチルは，中国支援の続行と中国への新しいビルマルートの打通作戦を確認した。これは「レド公路」と呼ばれ，インドのレドから北ビルマのミートキーナ，バーモ，ナンカンを経て，中国雲南省の芒市，龍陵，拉孟，保山，昆明へと至る「新ビルマルート」であった。

一方で，ビルマは単なる地上ルートの中継地としての役割だけでなく，英領インドや中国内陸部への進攻基地としての役割が求められた。なかでもビルマはインド工作の進攻基地として重要な位置にあった。1944 年 3 月，第 15 軍司令官の牟田口廉也（むたぐちれんや）が，北ビルマを起点としたインド進攻作戦（インパール作戦）を強行に推し進めた背景には，ビルマ奪回を狙う英印軍の作戦拠点を奪い，レド公路を遮断し，ひいてはインド独立運動に乗じてインドの反英独立の気運を醸成しようとする目論みがあった[(4)]。牟田口のインド進攻熱の異常な高まりの中で，雲南地区を起点とした中国内陸への進攻作戦計画が棚上げとなったのは言うまでもない。このような作戦企図の中で，日本軍は北ビルマ・雲南戦線をインパール作戦の支作戦[(5)]と見なし，第 56 師団と第 18 師団はインパール作戦を後方から支援する持久戦を展開した。ところが，後方補給を全く無視したインパール作戦は一月も経たずに失速し，1944 年 5 月 17 日に連合軍が北ビルマの軍事拠点のミートキーナを攻略すると，大本営はインド進攻作戦の続行を断念し，雲南地区に防衛拠点を置いてレド公路を遮断する作戦に転じた[(6)]。

---

(2)　滇とは雲南省を，緬とはビルマを意味する。ラングーン経由のビルマルートの経路は，ビルマ東部のシャン高原のラシオを経て，ビルマと中国との国境の街ワンチンに通じ，中国雲南省の遮放，芒市へと至り，さらに龍陵，騰越，拉孟を経て，保山，昆明に至るルートであった。ビルマ経由以外のルートに，広東を経由するルート，仏印ハイフォンを経由するルート，さらに新疆を経由したソ連からのルートがあったが，その中でも主要な補給路となった広東，ハイフォン及びビルマからの補給路の遮断を目的に，1942 年の日本軍の南方作戦は展開した。

(3)　ヒマラヤ山脈の突き出た高地のことを，「ハンプ（瘤（こぶ））」と呼ぶ。この「ハンプ空輸」により，インドから航空機で昆明へ軍事物資を，帰航便に中国兵を乗せてインドへ輸送した。米軍はインドで中国兵に米式訓練を施し，雲南方面の中国兵と呼応して，インドのレドから北ビルマを経て雲南へ至る地上ルート（レド公路）の打通作戦を進めた。

(4)　陸戦史研究普及会編『陸戦史集 16　雲南正面の作戦ービルマ北東部の血戦』（原書房，1970 年）はじがき，1 頁（以下『雲南正面の作戦』と略す）。

(5)　インパール作戦の支作戦として，1943 年 10 月から北ビルマではフーコン作戦を，雲南では怒江作戦を展開した。フーコン作戦は，印支補給路の遮断，インパール作戦の側面擁護及び中国軍への牽制の目的があった。怒江作戦は，騰越地区の豊富な農作物に対する日中双方の兵站確保の戦闘であった。詳細は防衛庁防衛研修所戦史部『戦史叢書　インパール作戦』（朝雲新聞社，1969 年）115 頁を参照。

(6)　北ビルマ・雲南を重点とする作戦企図から 1944 年 4 月 29 日に，ビルマ方面軍の編成に第 33 軍（昆）が創設。ビルマ方面軍（河辺正三中将）は，1943 年 3 月 27 日に創設。その後，方面軍の編成は

1944 年 7 月 2 日，南方軍はインパール作戦の中止を決定し，雲南怒江西岸地区及び北ビルマにおけるビルマルート遮断に重点を置く作戦を発動した。(7) 第 33 軍司令官本多政材中将は，当初からビルマに駐屯していた第 18 師団（菊），第 56 師団（龍）に加え，1944 年前期に編入された第 53 師団（安）及び第 49 師団（狼）の一部（歩兵 168 連隊）を，さらに 7 月中旬にビルマ南西のベンガル湾岸を防衛していた第 2 師団（勇）を，新たに北ビルマ・雲南戦線に投入し戦力の増強を図った。第 33 軍主導の雲南の怒西地区における新作戦は，ビルマルート遮断の「断」をとって「断作戦」と呼ばれ，作戦開始は 1944 年 9 月 3 日と決まった。断作戦は，連合軍のレド公路打通作戦に対抗する遮断作戦であると同時に，拉孟をはじめとする雲南地区の日本軍陣地の要所を確保する作戦であった。こうしてインパール作戦の支作戦であった北ビルマ・雲南戦線が，同作戦の大敗を契機に，次第に日本軍のビルマ防衛作戦の主作戦と位置づけられようになった。ビルマ防衛作戦の進展を左右する断作戦の成否は，第 56 師団第 113 連隊主力の拉孟守備隊が，9 月 10 日頃まで拉孟陣地を保持できるか否かにかかっていた。同守備隊は，1942 年 5 月，怒江を見下ろす険峻な山上に堅固な拉孟陣地を構築し，その後 1944 年 6 月から 9 月にかけて，ビルマルート遮断の「最後の砦」として，約 100 日間の死闘を展開した。

一方で，拉孟はビルマルート遮断の要所としてだけでなく，中国大陸内部への進攻起点としても重要視されていた。(8) 時同じくして中国大陸では日本軍による一号作戦が展開されていたが，北ビルマ・雲南戦線におけるビルマルート遮断を目的とした断作戦と中国大陸における大陸打通を目的とした一号作戦との間には戦略的に密接な関係があったと見なされている。(9)

英国の公刊戦史にも，騰越，龍陵，松山（拉孟）などの怒江西部のビルマルートの要所を攻略し，インドのレドから北ビルマを経て重慶に至るレド公路（新ビルマルート）の一日も早い開通が連合軍の早急な目的であり，最終的な目的は，北ビルマのミートキーナ，バーモ，ラシオの占領である(10)と書かれてあるように，拉孟は，日本軍はもとより連合軍にとっても重要な戦略上の要点であったた

徐々に拡充し，第 15 軍（牟田口廉也中将），第 28 軍（桜井省三中将），第 33 軍（本多政材中将）に加えて，第 53 師団（武田馨中将），第 49 師団（竹原三郎中将），独立混成第 24 旅団（林義秀中将），独立混成第 105 旅団（松井秀治少将）及び方面軍直轄部隊で構成。

(7)　前掲書『雲南正面の作戦』，102 頁。

(8)　中国雲南地区を起点として，中国内陸部の大里や昆明へ進攻する「保山攻略作戦」が雲南に進駐した第 56 師団の参謀や南方軍参謀の間で拉孟全滅の直前まで検討されていた（前掲書『雲南正面の作戦』，27 頁）。1943 年 10 月時点では，明らかに「保山攻略作戦」は存在していた。また，第 33 軍第 56 師団参謀の野口省己は，1944 年に入ってからも参謀長黒川邦輔大佐から「秘かに保山攻略計画を策定しておけと命ぜられた」と回想録に書いている（野口省己『回想ビルマ作戦』光人社，1995 年，41–42 頁を参照）。

(9)　1944 年 1 月 24 日，大本営から支那派遣軍に，中国から日本本土空襲を阻止すべく，重慶政府下の航空基地の破壊を目指した一号作戦が発動された。一号作戦には，南方と日本本土の間の陸上交通戦を確保するという大陸打通の目的もあった。吉田裕，森茂樹『アジア・太平洋戦争』（吉川弘文館，2007 年）201–202 頁を参照。

め，中国軍は 5 個師団 4 万余の兵力を投入し多大な犠牲を払い，日本軍も守兵約 1300 名が全滅してまで確保しようとした。

1944 年 9 月 7 日の拉孟守備隊，14 日の騰越守備隊の相次ぐ全滅は，断作戦の雲南地区における作戦目的の変更を余儀なくした。第 33 軍本多軍司令官は，騰越全滅の報をもって即時各部隊の攻撃中止を決意した[11]。大陸内部における二つの守備隊の全滅は，雲南戦線を適宜終息させるだけに留まらず[12]，連合軍のインドから中国へ至る地上ルート（レド公路）打通の時期を結果として早め，全ビルマ戦線の崩壊を招く誘因となった。

1945 年 1 月下旬頃，インド発の中国軍（X 軍）と雲南発の中国軍（Y 軍）がレド公路上のモンユで合流しインドから中国の地上ルートが打通した。時同じくして，約 2 年 8 ヶ月に亘り，連合軍の補給路の遮断のため山深い雲南の地に盤踞していた第 56 師団は，ついに雲南から完全敗退した。こうしてインパール作戦以後の日本軍のビルマ戦線は，崩壊の一途を辿り，撤退作戦の様相を呈するようになる[13]。

2. 問題の所在

旧軍や旧防衛庁指導による「公刊戦史[14]」では，拉孟全滅戦をどのように描いているのだろうか。実は，「拉孟守備隊の勇戦と玉砕」という題名が示すように，第 33 軍及び第 56 師団上層部から見た「玉砕」戦闘としてあるべき姿の戦闘史として描いており，実際に戦場で戦った将兵の実像が必ずしも正確に表されていない。公刊戦史では，全滅戦での戦闘を至るところで「勇戦敢闘」と讃えている一方で，戦闘の具体的な中身が明らかにされていない。例えば，1944 年 6 月 2 日に中国軍は第一次攻撃を開始したが，6 月 7 日には日本軍の補給路は早くも遮断され，6 月半ばには拉孟守兵はすでに劣勢であったにもかかわらず，公刊戦史では，6 月 20 日頃には，「完全に敵の攻撃を粉砕（275 頁）」し，第二次攻撃（7 月 4 日）においても，「守兵の勇戦敢闘（277 頁）」により 7 月 15 日に中国軍の攻勢を挫折し，さらに第三次反攻（7 月 20 日）では，残存兵力 300 名に減少した守兵らは，「壮烈な戦闘（278 頁）」と「凄惨な死闘（279 頁）」の末，最後に残存兵力 80 名が「玉砕」し，末尾は南方軍総司令官及び第 33 軍司令官による「個人感状の付与（285 頁）」で結ばれている。筆者は拉

（10） Major-General S. Woodburn Kirby, *The War Against Japan, vol.3,* East Sussex, 1961, p.395.

（11） 防衛庁防衛研修所戦史部『イラワジ会戦ービルマ防衛の破綻』（朝雲新聞社，1969 年）261 頁。軍命令により，第 56 師団は拉孟，騰越救出のため龍陵周辺にいた部隊の攻撃を中止し，当時なお中国軍の重囲下にあった平戛守備隊の救出に向い，同守備隊を 9 月 22 日に救出した。

（12） 1944 年 11 月，軍命令により，第 56 師団は，師団司令部あった龍陵から，芒市，遮放へ撤退し，徐々に戦線を縮小しながら，1945 年 5 月にシャン高原に至る。

（13） 1944 年末から 1945 年のビルマ作戦は，イラワジ会戦（盤作戦），メイクテーラー会戦（邁作戦），シッタン作戦など，逐次英軍の攻撃を牽制しながらの撤退作戦であった。

（14） 前掲書『イラワジ会戦ービルマ防衛の破綻』，269–288 頁。

孟守兵の戦闘が勇戦敢闘ではなかったと主張しているのではない。むしろ，公刊戦史の記載方法では，「勇戦敢闘」であれ，「壮烈な戦闘」や「凄惨な死闘」であれ，実際に戦場で戦った将兵の戦闘の中身が見えてこないことを問題にしている。したがって，本稿の第一の課題は，この 100 日間の戦闘の後，全滅に至った拉孟守備隊の戦闘について，実際に戦場で戦った兵士の側から見て，公刊戦史の史実と戦場の実像との相違点を提示した上で，陣地構築から全滅戦までの事実の解明をおこなうことにある。第二の課題は，中国文書史料や一部の聞き取りを通して，従軍慰安婦の，中国現地住民の，人体実験や細菌戦の被害者などの声なき「声」を歴史の表舞台に引き上げて，軍上層部から見た拉孟全滅戦とは異なる戦争被害者の被害の実像を提示することにある。第三に，拉孟守備隊 1300 名余の生命と引き換えに，第 33 軍司令部が敢行したビルマルートの遮断作戦（断作戦）について，無謀で勝算のない作戦であることを実証的に検証し，拉孟守備隊が全滅に至る意味を問う。

本稿の研究方法は，第一に，一次史料に依拠した実証的研究である。一次史料が多くは存在しない，あるいは存在しても利用できないような日本の現状では，とりわけ英軍ならびに米軍の一次史料に依拠せざるをえない。英国史料としては，英軍の公刊戦史及び諜報文書[15]を利用する。英国は当時の雲南地区に関して活発な諜報活動を実施し，1943 年 12 月から 1944 年 12 月まで，月に一度昆明の英国領事館からロンドンに軍事情報を送信していた。そのレポートから拉孟守備隊を取り巻く戦況を読み取ることが可能となる。一方で，米軍の公刊戦史以外に昆明収容所を対象とした「連合軍尋問報告書[16]」を利用する。全滅後に捕虜となった日本兵と慰安婦の名簿・尋問内容及び日本兵の精神的教化が記載されており，捕虜収容所での彼らの処遇や生活状況が明らかになる。

第二に，拉孟守備隊の希少な生存者である木下昌巳中尉や早見正則上等兵らの戦争体験者の手記に依拠する。木下中尉は金光守備隊長命令により陣地を脱出した全滅戦闘の記録を手記『玉砕』（2002 年）に纏めて遺族や関係者に配布した。また，『悲劇の戦場ビルマ戦記』（1988 年）にも「拉孟守備隊玉砕記」が収められている。早見上等兵の手記には，『拉孟玉砕の真相とわが脱出記』（1981 年）がある。

第三は，本稿の叙述の核となるオーラル・ヒストリー（聞き取り）という方法である。具体的には，一人目の木下中尉の聞き取りは，第 1 回の 2002 年 11 月 29 日から，10 回以上に及び，現在に至っている。彼が事務局長を務める財団法人全国老人福祉助成会の事務所のある新橋で毎回，約 1 時間から 1 時間半の聞き取りを実施した。二人目の早見上等兵の聞き取りは，2005 年 9 月 6 日に，紹介者の在日中国人ジャーナリスト朱弘の柴又の自宅で，朝から夕刻までの一日を要して実施した。

（15） *Kunming Monthly News Summary, Dec. 1943–Dec. 1944*（National Archive FO371/41639 以下 FO371/41639 と記す）。『昆明月間ニュース・サマリー』には，外務省による極秘電報や暗号電文や雑誌記事も含まれている。

（16） *Korean and Japanese Prisoners of War in Kunming, 28 April, 1945*（RG 226 Records of the Office of Strategic Services, National Archives in USA）.（韓国人ジャーナリスト韓元常氏より 2005 年 6 月 4 日に入手）。

早見は毎年，9 月 7 日の拉孟守備隊の「玉砕」日に合わせて福岡から上京し，靖国神社を参拝している。一方，朱弘は，2003 年 11 月 26 日に，拉孟陣地の朝鮮人慰安婦朴永心に，松山（拉孟）の臨時収容所前にて聞き取りを行っており，彼から貴重な朴永心の証言を入手することが可能となった。三人目の小林憲一中尉は，拉孟陣地に武器弾薬の空中補給を敢行した第 33 軍配属飛行班隊長である。小林の聞き取りは，2002 年 10 月 29 日を皮切りに，田無の自宅で 7 回以上の聞き取りを実施している。四人目の第 33 軍後方参謀の黍野弘（きびのひろむ）少佐の聞き取りは，2003 年 7 月より月 1 回の偕行社（市ヶ谷）で黍野が講師を務める「新古事記研究会」に出席する傍ら，黍野が死去する 2008 年 1 月まで実施した。

このように，本稿は，連合軍側の一次史料と，直接の戦争体験者の手記及びオーラル・ヒストリーを用いて，実証的に拉孟全滅戦の事実の解明をおこなう研究であり，他に類がなく本稿が初めての試みであると思われる。

3. 先行研究

日本現代史家の吉田裕が主張しているように，従来の日本の軍事史研究は戦訓研究が中心で，将来の戦争に向けて過去の戦争や戦闘の中から教訓を導き出していこうという研究であった。それゆえ研究の担い手は，旧軍の参謀や旧防衛庁の自衛官などによる作戦分析中心の戦闘史研究家であった。吉田は今後の戦闘史研究は，「兵士のレベルまで降りて書かなければ戦場の内実は分からない」と述べ，戦闘体験者の証言の重要性を示唆し，従来の戦訓・戦史研究を超えた戦場にせまる歴史学の必要性を提示した[17]。しかし，戦闘史研究の中で一番危惧されるのは，戦後 60 年以上の年月が経過して直接の戦争体験者が高齢により亡くなっているという問題である。拉孟守備隊の僅かな生存者は，すでに 90 歳前後の高齢に達し，聞き取りも最終段階に入りその作業も急務を要している[18]。

拉孟守備隊の先行研究は，旧防衛庁編纂の「公刊戦史[19]」に依拠している。全部で 658 頁からなる公刊戦史『イラワジ会戦ービルマ防衛の破綻』の中で拉孟守備隊に関する記述は 20 頁にも満たない。しかも記述内容の大半は脱出将校木下昌巳中尉[20]の報告が中心であり，木下中尉が師団司令部の報告時に参照したのが，戦闘間に交わされた拉孟守備隊長金光恵次郎少佐と師団司令部の無線交信

（17）『図書新聞』（2008 年 11 月 15 日）。

（18） 拉孟守備隊の生存者は，現在（2009 年）確認できる範囲では，木下昌巳（野砲兵第 56 連隊中尉）と早見正則（歩兵第 113 連隊上等兵）の 2 名だけである。

（19） 雲南作戦に関する研究は，陸戦史研究普及会『雲南正面作戦・ビルマ北東部の血戦』（原書房，1970 年），防衛庁防衛研修所戦史室『イラワジ会戦ービルマ防衛の破綻』（朝雲新聞社，1969 年）がある。さらに，前掲書『インパール作戦』の「怒江作戦」も参照（93 頁）。

（20） 大正 11 年 1 月 2 日に，熊本で生れる。昭和 13 年 8 月に，陸軍士官学校に合格。同年 12 月 1 日，東京市ヶ谷の陸士に入校。昭和 17 年 12 月，56 期生として木下昌巳は陸軍士官学校を卒業し見習士官を経て，昭和 18 年，野砲兵第 56 連隊（久留米編成・龍兵団）第 7 中隊に配属。野砲兵第 56 連隊は，ビルマから中国雲南省まで進軍した連隊である。

記録であった。そのため限定的な戦闘の経過報告が重視されるに留まっている。その記述内容は軍上層部側からみた「玉砕」戦闘史である点は，既に述べてきた通りである。

以上の口述史料を検証し補完する文書史料として，いくつかの刊行物がある。[21] 拉孟守兵の森本謝（ながし）による『玉砕　ああ　拉孟守備隊』（青柳工業株式会社，1981 年）には，共に拉孟の戦場で戦い，奇跡的に生還した鳥飼久と早見正則の手記も収められ，一兵卒の兵士が見たありのままの戦闘体験が記述されている。同様に龍兵団の野砲兵として雲南戦線に参戦した太田毅『拉孟ー玉砕戦場の証言』（昭和出版，1984 年）には，11 名の拉孟守備隊関係者の証言による拉孟全滅戦の詳細が記されている。品野実『異域の鬼ー拉孟全滅への道』（谷沢書房，1981 年）は，全滅戦に至る戦闘の経過だけでなく，慰安所の実態，住民虐殺，細菌戦，人体実験などの戦争被害にも触れており，一連の将兵の回想録や手記とは趣が異なる。品野は 1942 年に毎日新聞に入社し，1944 年に龍兵団の最後の拉孟守備隊の補充兵となり，拉孟を目指すがシンガポールで拉孟の全滅を知る。

最近の雲南研究としては，雲南地区の日本軍による住民虐殺についての伊香俊哉の研究「中国雲南省にみる日本軍の住民虐殺 1942–1945」（田中利幸編『戦争犯罪の構造』（大月書店，2007 年）に所収）がある。日本軍側の史料がないため，雲南の西部地域（滇西（てんせい）地区）の現地住民への聞き取り及び中国側文資料から抽出した虐殺事例を類型化しながら，日本軍の対住民態度の決定要因を明らかにしている。伊香の研究は，拉孟に焦点を当てたものではないが，滇西地区での細菌戦や性暴力等の戦争犯罪についての具体的な中身が詳述されている。特に，第 56 師団の歩兵団司令部が置かれた龍陵での住民支配体制について詳しい。伊香の研究成果と著者の拉孟将兵への聞き取りをクロスさせることで，拉孟陣地構築時の日本軍の占領体制の実態の一部が明らかになった。[22]

連合軍側の研究状況については，英軍の公刊戦史[23]に中国軍の反攻と日本軍の攻防として 7 頁余の記載があるが，主に日中双方の作戦の概要と中国軍の脆弱性が記されているにすぎず，日本軍守備隊の詳細な記載は見当たらない。一方，米軍の公刊戦史[24]には，「松山（拉孟）戦闘」に関する日中両軍の戦闘の記載があるが，スティルウェル将軍率いる米中軍は，松山戦闘が緊迫した原因を中国の軍隊の脆弱性と政治の退廃に求め，松山戦闘を日中戦争の文脈の中で捉えている。

---

(21) 戦史上類がない内陸部での全滅戦闘は，戦記作家の格好の小説の題材にもなった。楳本捨三『壮烈拉孟守備隊』（光人社，1983 年）や一兵卒として雲南戦線に参戦した古山高麗雄の『断作戦』（1983 年），『龍陵会戦』（1985 年），『フーコン戦記』（2000 年）の文藝春秋社の戦争文学三部作がある。

(22) 他には，拉孟全滅戦の朝鮮人慰安婦の聞き取りを主題にした西野瑠美子『戦場の「慰安婦」ー拉孟全滅戦を生き延びた朴永心の軌跡』（明石書店，2003 年），山田正行『アイデンティティと戦争ー戦中期における中国雲南省滇西地区の心理歴史的研究』（グリンピース出版会，2002 年）がある。山田の研究は，拉孟に限定したものではないが，滇西（てんせい）地区全般の戦争被害の実態を実証的に分析すると共に戦争という構造的な暴力が生み出される加害者の心理と実践の病理を明らかにしている。

(23) *The War Against Japan vol.3*, chap.28.

(24) *US Army in World War II The China-Burma-India Theater Stillwell's Command Problems Part*（中国人ジャーナリスト朱弘氏より 2009 年 2 月 13 日に入手）。

一方，中国側の研究では，拉孟という地名ではなく，「松山」と記されており，特に雲南戦線における抗日戦闘を中国では「滇西抗戦」と呼び，その研究動向は極めて政治的である。現中国共産党にとって，唯一中国が勝利した抗日戦争の担い手が国民党であるのは都合が悪い史実であるため，拉孟守備隊全滅戦は中国では「歴史の空白」とされ黙殺されてきた。近年，反日感情の高まりと共に，日本軍の侵略戦争の証拠収集として中国軍の元将兵や現地住民に対する聞き取りによる口述研究が進行中であり，松山（拉孟）陣地周辺での日本軍の占領体制と戦闘の実態が明らかにされつつある。

II. ビルマルートと拉孟

1942 年 5 月 5 日，第 56 師団（龍兵団）歩兵第 146 連隊（坂口支隊）は，先遣隊としてビルマ東北部より国境の町ワンチンを超え，ラシオ，芒市，龍陵，鎮安鎮を攻略し，ついに中国雲南省の怒江の線まで進出し，ビルマルートの要所の拉孟を占領した。[25] 第 56 師団は，師団司令部を芒市に，歩兵団司令部を龍陵に置いて各地の陣地構築を開始した。

占領時，日本軍は現地住民を全員強制退去させたのではない。[26] 占領後の陣地構築の必要から馬方，召使，トーチカの修理，塹壕堀り，道路整備の強制労働に住民を駆り出した。[27] 現地住民は，「維持会」（漢奸による傀儡組織）を通じて徴集された。[28] 日本軍は占領地の住民支配の方法として，進攻時，武力で強制的に支配するのと同時に，現地の有力者を懐柔し，地域ごとに「維持会」や「軍政班」などの傀儡政権を組織して住民を間接的に支配した。また，少数民族が多い雲南地域を支配するために，少数民族社会における一種の封建的領主であった「土司」との関係作りを重要視した。[29] 中央公論社の黒田秀俊は，1943 年に雲南戦線の取材中，芒市の軍司令部の計らいで，ある土司の別荘を訪問する機会を得た。黒田一行には，土司の日本人妻が流暢な日本語で応対し，「使用人や小作人を通じて日本軍に重慶側の情報を提供している」と力説した。しかし，裏で土司は，使用人や小作人が重慶側のゲリラと通牒しているのを承知で暗黙の支持を与えていた。[30] 日本軍もまた土司の二枚舌を承知の上で現地住民の支配に利用した。

第 56 師団は，龍陵西北の白塔村の裏山に歩兵団司令部を設置した。そこは現地で有力な氏族の

---

(25) 坂口静夫歩兵団長率いる坂口支隊は，フィリピンのダバオ，ボルネオ，ジャワを攻略し，ビルマ戦線に投入された部隊である。5 日の拉孟攻略後，一部が 10 日に騰越を攻略した。

(26) 日本軍が立ち退かない滇西地区の住民を虐殺した事例が，伊香の研究（2007 年）で報告されている。152–157 頁。

(27) 閻道永「日本軍侵略平戛，勐糯」，192 頁。平戛の陣地構築の例である（中国人民政治協商会議雲南省龍陵県委員会編『松山作証』雲南美術出版社，2005 年に所収）。

(28) 伊香前掲書，154 頁。

(29) 同上書，163–164 頁。「土司」は表面的には日本軍の維持会の運営に協力しながら，実は国民政府や中国軍の指揮で，遊撃隊を組織し中国側の抗日体制を形成した。

(30) 黒田秀俊『軍政』（学風書院，1952 年）162–163 頁。

趙家の祖先を奉る場所であった。[31] 白塔村には「軍政班」と呼ばれた植民地統治機構の本部が置かれた。軍政班には日本軍の高級将校が属し，「奴隷化教育」と呼ばれる日本語教育などの植民地政策が実施され，他にも税の徴収や司法機関の役割も果たしていた。[32] 趙は白塔村では評判の悪い金持ちであり，趙が提供した住居は軍政班の事務所となった。[33]

松山（拉孟）付近で陣地構築が開始された1942年5月以前から，日本軍は現地住民を松山付近から強制的に退去させようとした。中国史料によると，731部隊が細菌を松山付近の竹子坡村で散布し，その後現地で「鳥の巣病」と呼ばれる風土病が流行し，多くの部落民が死亡したという記録が残されている。[34]「鳥の巣病」の症状は，ハルピンでのペスト菌による症状と酷似していたので，後に「ペスト」だと断定された。[35] 1942年5月から9月までの5ヶ月間，拉孟陣地に最初の観測所を形成した野砲兵の関昇二中尉によれば，「拉孟の周辺には人気のない廃屋はあったが，住民の姿はなかった」[36]と証言していることから，日本軍は陣地構築以前から現地住民を強制的に退去させていたと考えられる。品野によれば，ペスト菌などによる汚染の謀略は，日本軍撤退後の混乱を狙うために用いられたが，[37] 陣地構築前に実施された可能性が指摘されよう。伊香によるペスト被害の事例では，「撤退時に日本軍に敵対的であった村人にはペスト菌入りの黒い注射をし，維持会のメンバーで日本軍に協力的な村人には白い注射をした。黒い注射をされた者の9割はペストの伝染病で死亡した」とある。[38]

松山周辺の竹子坡村の場合は，1942年に日本軍が突然村にやって来て怪しい行為を行っている。ある者は土地を測量すると言ってやって来て，村の山の上に簡単な旗を立てただけで実際に測量はしなかった。また別の者は，肩に大きな箱を担いで木製の人形劇をすると言ってやって来たが，彼らは何のためにやって来たのか，本当の目的がわからなかった。[39] 日本軍は1942年5月から竹子坡村の周辺にある山，つまり松山に拉孟陣地を構築したが，そこは以前に怪しい者がやって来て旗を立てた場所であった。[40]

---

(31) 陳景東，袁宏，何徳尊，張国陽「龍陵城区日本軍罪証遺跡簡介」，239頁（前掲書『松山作証』に所収）。
(32) 同上，240頁。
(33) 同上，241頁。
(34) 趙平「竹子坡村遭日軍鼠疫病毒惨案実録」，199頁。この史料には，竹子坡村で死亡した26名の年齢，性別，氏名が記載されている（前掲書『松山作証』に所収）。
(35) 1939年，勅令によりハルピン郊外に巨大な生体実験場が造られ，中国人，ロシア人の男女約三千名が生体実験された。細菌兵器は，1925年のジュネーブ議定書で使用が禁止されたが，日独米英は批准しなかった。
(36) 関昇二の聞き取り（2009年4月5日）関中隊長の名から「関山陣地」と名づけたれた。
(37) 品野前掲書，197頁。
(38) 伊香前掲書，156頁。
(39) 趙平「竹子坡村遭日軍鼠疫病毒惨案実録」，200頁（前掲書『松山作証』に所収）。
(40) 同上，204頁。

日本軍は進駐後の1942年9月から1943年3月頃まで，拉孟の周辺部で敗走できなかった中国軍の残兵に対して大規模な掃蕩活動を展開した。この期間に現地住民に対する集団虐殺や村全体を焼却するなどの行為も度々行われたようである。(41)

III．拉孟守備隊全滅戦闘の内実

1．全滅戦前の平時の拉孟（1942年5月上旬から1944年5月上旬)

1–1．拉孟陣地構築期

1944年5月初旬に拉孟守備隊の守備隊長となった歩兵第113連隊長の松井秀治大佐は，第113連隊主力，野砲第3大隊，輜重兵，衛生隊，通信隊，防疫給水隊の各一部を指揮し，怒江に架かる恵通橋を眼下に見下ろす山上に拉孟陣地を布陣した。(42) ところが，5月8日，拉孟北方の紅木樹方面に中国軍の反攻の兆しを察知した松井連隊長は，軍旗を拉孟に残して第113連隊の第2大隊主力を率いて出兵した。紅木樹の戦闘には，拉孟守兵の生存者の早見正則上等兵が松井部隊の第1機関銃中隊として参戦している。早見上等兵は紅木樹の八湾（バーワン）という部落に進軍したが，八湾の谷には松井部隊の負傷兵が沢山いたので，早見の1個分隊は，負傷兵を護衛して拉孟に引き返した。その後早見の分隊は，中国軍に包囲され再び本隊に復帰できずに拉孟全滅戦に巻き込まれることになる。(43) 一方で，松井部隊は，各地を転戦して最後まで拉孟へ帰還できず，野砲兵第56連隊第3大隊長金光恵次郎少佐が拉孟守備隊長となった。(44)

このように歩兵連隊主力を失った拉孟守備隊の兵力は約1300名に減少した。その中には入院患者約300名も含まれおり，実質的な戦闘兵力は900名にも満たなかった。(45)

一方，相対する中国軍の兵力は，師団通信情報によると，第11集団軍第6軍が約4000名，新編第39師が約5000名（途中龍陵へ転進)，新編第28師が約6900名，軍司令部と直轄部隊が約7500名，栄誉第1師が約5600名，第28師が約5600名，第103師が約6900名の総兵力約41500名であり，(46) 日本側の兵力の劣勢が明らかとなる。

金光大隊長は陣地構築に入魂した。工事用の材料は総て現地調達であり，セメントの代わりに鹵獲（ろかく）した鉄板や空のドラム缶に土を入れて代用し，掩蓋用の木材は，陣地付近の松林を伐採し，松の丸太

---

(41) 詳しい事例は伊香の前掲論文164–166頁を参照されたい。

(42) 第56師団歩兵第113連隊のうち，連隊本部と第2大隊が拉孟に，第1大隊は拉孟と龍陵の間の鎮安街に，第3大隊は工兵第56連隊主力と共に龍陵を守備した。

(43) 早見正則「拉孟玉砕の真相とわが脱出記」，94頁（森本謝『玉砕　ああ　拉孟守備隊』青柳工業株式会社，1981年に所収)。

(44) 金光少佐は明治29年生の48歳で，一兵卒から叩き上げで少佐まで上りつめた逸材である。

(45) 木下の前掲手記『玉砕』，36頁には，松井部隊は歩兵各隊から約700名抽出したと記されている。

(46) 品野前掲書，221頁。

をそのまま利用した。劣悪な食糧事情のなかでの陣地構築で，兵隊の味わった苦労は並大抵ではなかった。1942 年末までに陣地は概ね完成したが，1943 年以降は連合軍の連続的で長期的な空爆に備えた陣地のさらなる強化が求められた。通信線は地下へ埋めさせ，新たに複廓陣地を構築し，すべて交通壕で連結し，周囲に鉄条網を増築した。最大の難関が飲料水の確保であったが，岡崎正尚軍医大尉と吉田好雄准尉らの防疫給水部がその任務にあたった。彼らは高地の拉孟への給水に苦心を重ね，1943 年秋頃に鹵獲（ろかく）したフォード自動車のエンジンを改造し，動力による揚水ポンプを作り上げている[47]。本道陣地と崖陣地との中間の谷間に良質の水源を確保し，1944 年正月までに鉄管による簡易水道を完成し，各陣地に配水管での給水に成功した[48]。

拉孟は標高 2 千メートルの山岳地帯にある。緯度は台湾とほぼ同じだが，日本のように四季があり，冬は山頂に雪を戴き，春は桜が咲き，秋は稔りの季節を迎え，夏は 6 月から 10 月が雨季のためさほど暑さを感じない。一方，怒江まで下ると，気候は一変して亜熱帯となり，サトウキビ，バナナが生り，マラリア蚊とさそりの世界へ変貌する。

山上の拉孟陣地の食料事情は悪い。1943 年から拉孟では，食糧や燃料を自給自足する方針を立てた。陣地付近に畑を作り，味噌，豆腐も自家製造し，木炭も自ら焼いた。馬用の乾草も現地住民を教育して作らせ，陣内に備蓄した。一兵卒だった早見上等兵は，拉孟ではタンポポみたいな草を，缶詰の缶を鍋代わりにして湯がいて粉醤油や塩を混ぜた「拉孟汁」を食べていた[49]。

公刊戦史によると，拉孟守備隊の兵站準備は，糧秣は 100 日分を目安にしたが，7 月下旬の砲撃で食糧倉庫が焼失し，7 月には 1 日に白米 3，4 合（450～600g）で，8 月には乾パンのみとなり 8 月末には食糧は完全に枯渇した。弾薬も 100 日分の戦闘を目標に集積された。10 榴は一門につき 500 発を弾薬庫に貯蔵し，歩兵弾薬は，大弾薬庫 4，小弾薬庫 23 に分散したが，中国軍の砲撃で相当量が破裂焼失し，6 月末には早くも弾薬が不足した[50]。

木下少尉が拉孟へ赴任した 1944 年 5 月頃は，まだ白米が主食であったが，生野菜がないので水耕栽培で小豆（あずき）からもやしを作り，陣地下の土民の畑からジャガイモをせしめてうまい味噌汁を飲んだ。ところが，7 月には食糧が不足し，戦闘が進行すると配水管や貯水槽は爆破され，8 月末には飲料水はなく雨水や泥水を飲んで戦闘する他なかった[51]。

軍内での拉孟陣地の評判は良かった。視察者は全員その強度に一驚した。視察者の一人，第 33 軍の野口省己参謀は，辺境の地でありながら防衛体制と共に生活基盤を整えた拉孟陣地を「山上の文化村」と賞賛した。さらに，野口は「部隊長の粋なはからいで，陣外の片すみに慰安所も設置され

（47） 太田毅『拉致ー玉砕戦場の証言』（昭和出版，1984 年）47 頁。
（48） 前掲書『雲南正面の作戦』，139 頁。
（49） 早見正則の聞き取り（2005 年 9 月 6 日）。
（50） 前掲書『雲南正面の作戦』，140 頁。
（51） 木下昌巳の聞き取り（2009 年 2 月 13 日）。

て，潤いのある生活も与えられるようになった」と書いている[52]。拉孟の慰安所は1942年末に裏山陣地に設置された[53]。通常，慰安所は後方に設置されるので，最前線の慰安所は稀である。慰安婦は朝鮮人15名と日本人5名の20名ほどがいた[54]。中国軍第8軍の捕虜となった朝鮮人慰安婦の朴永心は，「全滅寸前の壕に兵士と慰安婦が合わせて20名いた」と証言している[55]。衛生兵だった鳥飼久一等兵は，慰安婦らとは定期健診などで接する機会があったため，慰安所について幾つかの情報を持っていた。「慰安所には男の抱え主が2人いて，慰安婦は20人くらい。日本人は熊本の遊郭から来た者もいたが大半は年増でモヒ患者もいて暴れ出すこともあった。朝鮮人は若くて綺麗な子ばかりだったが，そのうちの一人が子供を産んで龍陵に替わったから拉孟では死なずに済んだ[56]」。

もう一人の衛生兵吉武伊三郎伍長の慰安婦についての証言がある。吉武伍長は，平時の拉孟で，高橋実軍医中尉や戸田寅彦軍医少尉に付いて性病検査の手伝いをしていたが，ほとんどの慰安婦が淋病だったので，毎日よく注射をしてやったと言う。性病の薬も一応揃っており，梅毒の特効薬のサルバルサンもあった[57]。

拉孟の眺めは絶景と評判になり，記者や慰問団が平時の拉孟を訪れている。慰安所が設置されて間もない1942年末に，女流作家の水木洋子が陸軍省嘱託で拉孟を訪れた[58]。水木は「前線のお正月」という題名で拉孟陣地の将兵の日常を記事にした[59]。

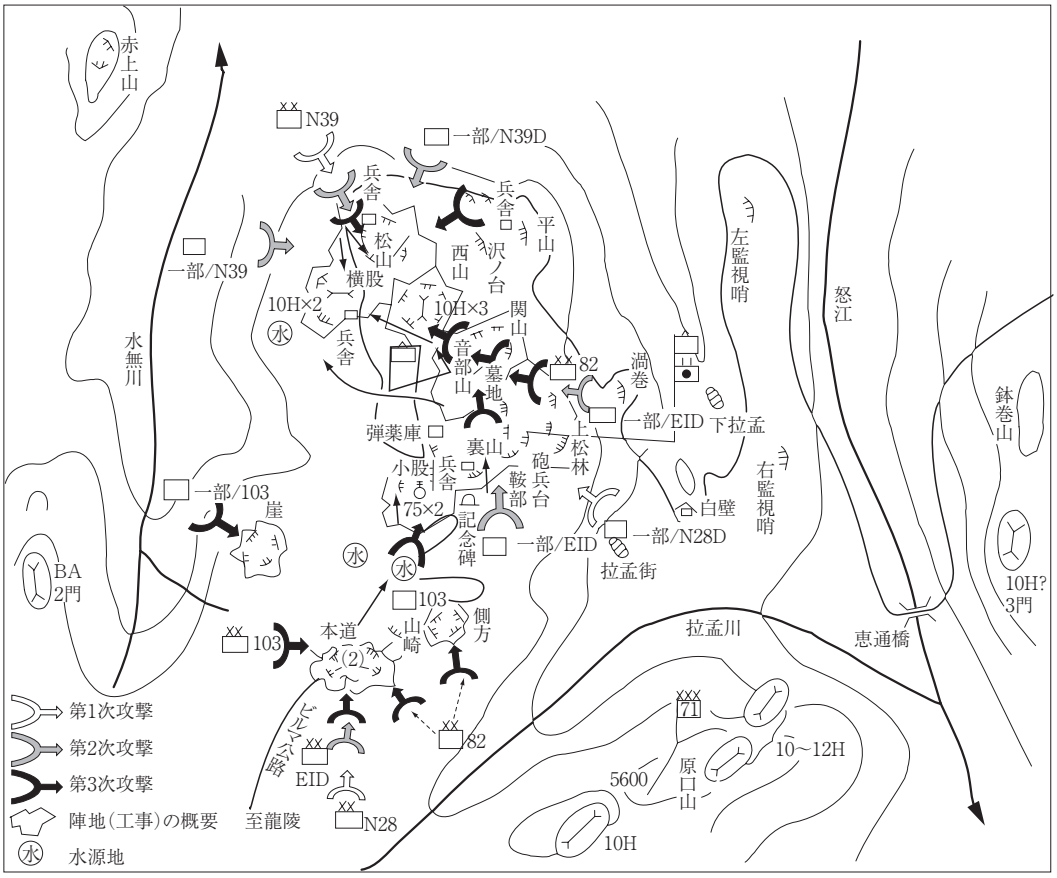
1943年初頭に，日本放送協会の前線慰問団が拉孟を訪れた。歌手の奥村彩子の振袖姿に兵隊たちは奇声を発して怪我人が出るほどの興奮ぶりであった。作曲家の古関裕而もまた同協会派遣の慰問団の一人として拉孟の最前線を訪れている[60]。

ちょうど慰問団がやって来て和らいだ雰囲気の平時の拉孟にて，信じられないことが行われていた。捕虜の肉体を使った生体解剖である。「死刑にすべきスパイであって，麻酔をかけ死ぬまでに生体反応をみながらの解剖だから，肉体的には死刑執行と変わるものではない」というのが当時の軍医やそれを許可した上級者の弁明であった[61]。だが，実際は「捕虜には麻酔はもったいないから」と麻酔なしで執刀し，「どこを切ると，どんな反応を示すか…」と切り刻み，胃袋を切ってもまだ生きているようであった[62]。

---

(52) 野口前掲書『回想ビルマ戦記』，172–173頁。
(53) 早見の聞き取り（2005年9月6日）。
(54) 品野前掲書『異域の鬼ー拉孟全滅への道』，194頁。
(55) 西野前掲書，107頁。
(56) 品野前掲書，314頁。
(57) 同上，319頁。
(58) 水木洋子（1910–2003）映画脚本家。水木のビルマ・雲南従軍記の詳細は，加藤馨「水木洋子の一生」連載第9回（『シナリオ』2008年9月号）を参照されたい。
(59) 水木の拉孟取材記は，「前線のお正月」として雑誌『令女界』（1944年1月）に掲載。
(60) 太田前掲書，48頁。
(61) 品野前掲書，181–182頁。

図２　拉孟守備隊攻防概要図



（出典）野口省己『回想ビルマ作戦』（光人社，1995 年）171 頁。

1–2．陣地配備と兵力

拉孟陣地と中国軍陣地の両陣営は，怒江を挟んで同じくらいの高さの山上に対峙していた。拉孟陣地は，相手陣地に向って右から上松林，裏山，関山，音部山，西山，横股，松山と名づけられ，前進陣地の本道陣地を含めて約 2 キロ四方にこれらの陣地が構築された。関山，音部山，西山の名称は，砲兵の中隊長の名からとった。上松山，本道は前進陣地で，裏山，関山，音部山，西山，横股，松山は主陣地である。本道陣地は一番高所の陣地で，滇緬公路の本道上にあるのでこの名が付いた。各陣地の兵力の配備は次の通りである。本道陣地は井上要次郎中尉以下兵力約 100 名。裏山陣地の兵力は只松茂大尉以下約 150 名。上松山陣地は松が多いからこの名が付き，兵力は高橋九州男大尉以下約 60 名。関山陣地は本道陣地に次いで高い主陣地であり，怒江対岸の中国陣地が一望できる最重要陣地で，兵力は辻義夫大尉以下約 70 名。音部山陣地には守備隊本部があり，金光恵次郎守備

（62） 同上，184 頁。

隊長がいた。音部山陣地は各陣地との指揮，連絡の中枢の役割を担い，兵力は眞鍋邦人大尉以下約160名。西山陣地は本道陣地に劣らず堅固な設備をもつ陣地であり，横股同様，砲兵だけの守備となる。兵力は毛利昌彌中尉以下70名。横股陣地の兵力は澤内秀夫中尉以下80名。松山陣地は拉孟陣地の最北端に位置し，滇緬公路のすぐ上にあり，兵力は松尾良種中尉以下約60名。他に衛生隊陣地に，野澤高雄中尉以下約400名がいた。[63] 1944年5月初旬，木下昌巳少尉の野砲兵第7中隊は横股陣地に配属された。木下は全滅戦闘のわずか5ヶ月前に拉孟の地を踏んだことになる。横股陣地は，拉孟陣地のなかでも滇緬公路外側の一番低い所に位置し，追い詰められた守備隊残存兵が最後に集結し全滅した陣地である。

金光守備隊長は，長期間堅持できるような陣地配備を検討したが，2キロ四方の拉孟陣地の守備は可能でも，周辺地域の配備までは不可能であった。第148連隊が守備した北方の拠点の騰越（とうえつ）は，拉孟から80キロあり，南方へ30キロの平戛（ひいかつ）は，第146連隊の僅か1大隊だけで守備した。日本軍は単に軍事的要点に守備隊を置くだけで手一杯であり，隙間だらけの防衛体制のなか，中国軍は容易に日本軍の守備範囲に侵入できた。当時の日本軍では1個師団で防御できる範囲は大体四キロ四方であり，第56師団だけで，ラシオからクットカイ，芒市，龍陵，拉孟までの滇緬公路の2百キロの防御は最初から論外であった。[64]

2. 連合軍の第1次攻撃と拉孟陣地の孤立（1944年5月10日頃から6月下旬）

2–1．後方補給路の遮断

1942年5月より中国軍は，2年余の歳月をかけて米式装備と訓練を重ねた雲南遠征軍（Y部隊）に改編し，[65] 1944年6月初旬，ビルマルートの再打通の為，約7万余の兵力を怒江東部に展開した。英国の公刊戦史には，5月10日に，雲南遠征軍第11集団軍と第20集団軍（合わせて12師団，兵力7万2千人）の常備編成軍の半分以上の兵力がサルウィン河を渡ったとある。サルウィン河とは怒江の別称である。中国軍は日本軍の7倍の兵力を有していたが，英米軍は中国の軍備を過小評価していた。中国軍は砲兵の装備や管理体制が不十分なので，戦術的な米空軍の支援の必要性を指摘した。[66]

雲南地区の英軍の軍事関連の5月のトップニュースが，サルウィン河の中国軍の渡河と連合軍のミートキーナ占領であり，雲南地区で多くの歓喜と共に受け入れられたと報じた。[67] 米中連合軍の空挺部隊がミートキーナを占領したのは1944年5月19日である。北ビルマの軍事拠点ミートキーナの失陥は，フーコンからの敗退と並んで日本軍に大打撃を与え，ビルマ防衛作戦の拠点を北ビルマ

---

(63) 前掲書『イラワジ会戦』，272頁。他に前進陣地が数個あり，合わせて70名の兵力。
(64) 木下前掲書『玉砕』，34–35頁。
(65) インドで米式訓練を受けたもう一つの中国軍精鋭部隊を「X部隊（新編中国軍）」と呼ぶ。
(66) *The War Against Japan*, *vol.3*, pp.395–5.
(67) FO371/41639 (May, 1944), p.73.

から雲南地区に移行せざるをえない契機となった。

6 月 2 日の午後，突如として鉢巻山の後方の中国軍の砲弾が西山陣地前方に落下した。拉孟守備隊の孤立無援の 100 日全滅戦闘の幕上げである。6 月 3 日になると，鉢巻山後方の中国軍砲兵はその数を増加させ，重砲級数門と野砲級数門の合計十数門で拉孟陣地に砲弾を浴びせた。すでに中国軍の砲数が優勢であった。

木下昌巳の証言によると，6 月 5 日，恵通橋周辺から怒江を渡河した中国軍新編第 28 師の一部（約 6 千名）は，前衛陣地の上松林陣地を直接攻撃した。さらに，この軍隊は拉孟南部を迂回しながら後方の鎮安街から龍陵方面に侵入して本道陣地を背後から攻撃した。本道陣地は滇緬公路の本道上にあるため，その後方に中国軍が進出したことは，拉孟陣地と龍陵の師団司令部の連絡路が遮断されたことを意味した。こうして龍陵と拉孟間の定期的な連絡車が途絶え，物資だけでなく司令部との連絡も無線のみとなった。6 月 2 日に戦闘が始まり，拉孟陣地はわずか 1 週間で中国軍に完全に包囲された。(68)

戦後，新編第 28 師の作戦参謀であった陳宝文は木下に次のように証言した。

「1944 年 6 月 3 日に恵通橋付近を渡河し，ここから 3 日かけて滇緬公路に到達して，拉孟と龍陵間の通信線（有線）を切断した。(69)」

陳の証言から，6 月 5 日か 6 日には通信線は遮断され，拉孟の孤立が裏付けられる。

公刊戦史には，「守備隊は連日の爆撃，砲撃及び地上からする執拗な反復攻撃に耐え，来攻する敵をその都度撃退して大きな損害を与え，6 月 20 日ごろには完全に敵の攻撃を破壊してその企図を頓挫させた。(70)」と記されているが，実際は 5 月上旬から 6 月下旬の第 1 次戦闘において，物量豊富な中国軍の攻撃を前に日本軍は多数の弾薬を消費し，小銃弾，手榴弾，食料が欠乏し，負傷者も続出，死者は 300 名を越える痛手を被っていた。

2–2．米式訓練と中国兵の変貌

中国軍の連日の反撃で拉孟では弾薬がいよいよ欠乏したので，銃弾の節約のため，銃剣による白兵戦で応戦した。木下少尉は，6 月 15 日早朝，拉孟の横股陣地の壕の中に突入してきた中国兵と白兵戦を行った。中国兵の装備は，最新の米式の自動小銃を所持しながら，一方で草鞋履きと中国製の粗末な被服との組み合わせであったが，木下少尉の眼に映った中国兵は勇敢で士気も高く，今までの弱兵の印象とは全く異なっていた。(71)

蔣介石の国民党政府は，当時「拉壮丁」と呼ばれた，拉致に近い強引な手段で兵士を徴兵した。特に「拉壮丁」では，雲南省に限らず，四川省，貴州省，湖南省の農民を強制的に連行した。徴兵後の

---

(68) 木下の聞き取り（2009 年 2 月 13 日）。
(69) 木下昌巳は陳宝文に 2002 年に訪中した際に面会し，この証言を聞いた。
(70) 前掲書『イラワジ会戦』，275 頁。
(71) 木下前掲書『玉砕』，49 頁。

兵士は，衣服や食糧も満足に与えられず，教育や訓練もほとんどないまま，数回銃の撃ち方を練習しただけで前線に出された。逃亡者は厳罰の対象であり死刑に処された。彼らは戦争する目的も意味も分からず当然士気も低かった。英国史料にも，新兵を縄で拘束し，まるで犯罪者のように監禁する中国軍の徴兵方法と兵士の悲惨な様子が記されている。[72] 雲南地区に集められた当初の中国兵は，栄養失調と病気と疲労で戦闘できる状態ではなかった。彼らを精鋭部隊に変貌させるために，米中軍のスティルウェル将軍は様々な改革を行ったが，一番効果があった改革が，兵士に充分な「給与（食事）」を与えたことである。スティルウェル将軍は，中国軍に米式装備と訓練を施し，中国軍 30 個師団（Y 部隊）を編成し，雲南から北ビルマに進出させた。同時にスティルウェルとインドに退去した中国軍（X 部隊）もインドのラムガルーで米式装備と訓練を施し北ビルマに進出させた。これは北ビルマ・雲南地区を舞台に日本軍を挟み撃ちにする「X-Y 作戦」と呼ばれた。[73] 1944 年 6 月以降，拉孟守備隊が怒江を挟んで対峙した中国軍は，この Y 部隊である。1943 年 3 月までに，ラムガルーの X 部隊の訓練は完了したが，Y 部隊の編成と訓練は思うように進まず，1944 年 4 月にようやく Y 部隊の訓練施設が昆明に設置された。[74] 重慶の英国大使館から 1944 年 4 月 27 日付のロンドンの外務省宛の秘密文書に，飢えて衰弱した中国兵が，昆明の米式訓練所に入所して変貌する様が報告されている。

「雲南と同じように四川での徴兵の光景は，19 世紀の『プレス・ギャング（press gang）』という嫌な思い出を彷彿させるが，一度入隊すると，新兵は食事を十分に与えられ，身体的状況も良好となる。中国の多くの若者には規律化の時代かもしれないが，これは国益につながる。中国の若者に正しい政治路線を教え込む良い機会だと考えられる。[75]」

英国大使館付武官は雲南西部を 2 回視察し，米軍が昆明に設立した訓練所が中国軍の精神性を大きく変えたことを評価した。

3. 連合軍による第 2 次攻撃（1944 年 7 月 4 日から 7 月 20 日）

3–1. 日本軍による第 1 次空中投下作戦

6 月初旬から 10 月下旬まで，雲南は雨季である。拉孟守備隊の 100 日全滅戦闘は雨季の最中に行われ，まさに雨と泥の戦いでもあった。第 1 次攻撃で失敗した衛立煌将軍は 6 月 20 日に，第 8 軍の栄誉第一師を拉孟に急派させ，第 2 次総攻撃の準備を進めた。

第 33 軍の軍司令官本田政材中将は，もはや地上からの拉孟守備隊への補給は不可能と判断し，空

（72） FO371/41639 (17 April,1944), p.53.

（73） 1945 年 1 月 24 日の第 56 師団の雲南地区からの撤退後，1 月 28 日に「Y 部隊」と「X 部隊」がモンユで合流し，ビルマルートが再開した。

（74） 森山康平編著 『フーコン・雲南の戦い』（月刊沖縄社，1984 年）16 頁。

（75） FO371/41639 (27 April,1944), p.51. プレス・ギャングとは，19 世紀英国の兵士強制徴募隊のことで，浮浪者や失業者を拉致して英兵とした。

中補給の命令を下した。公刊戦史によると，第1回目の日本軍機による弾薬投下は飛行第204戦隊の戦闘機6機で6月28日に実施された[76]。空中投下地点が横股陣地に決まり，木下少尉の第7中隊がその任務に就いた。守備隊内の士気が一気に上がった。

6月28日は運よく晴天に恵まれた。対空布版を裏山と横股両陣地に設置し，白布をT字形に広げ，飛行機の進入方向と投下位置を示した。正午近く，飛行第83戦隊第2中隊による空中補給が行われた。木下少尉は久し振りに見る日本軍機に目頭が熱くなった。同機は中国軍陣地から一斉に対空射撃を受けながらも，横股陣地のT字形をめがけて補給物資を投下した。守兵の中には，感激のあまり壕より飛び出し，夢中で腹巻や手ぬぐいや手を振って，連合軍機に射撃され戦死する者も出た[77]。

公刊戦史には，「守兵の勇戦敢闘により7月15日ごろになって中国軍の攻撃を挫折させた[78]」と短く記されているが，実際の戦闘の中身は苦戦に次ぐ苦戦であった。なかでも，本道陣地に対する砲火の集中は物凄く，1日で数千発の砲弾が撃ち込まれた。どこよりも堅固な本道陣地であったが，連日の砲弾の雨により，掩蓋が崩壊し，兵隊の損耗も著しかった。

早見上等兵の第1機関銃1個分隊も毎日降り続く雨の中，本道陣地の戦闘についていた。早見の脳裏に今でも消えない恐怖体験がある。中国軍の新型兵器の火炎放射器の物凄さである。火炎放射器で多くの守兵が犠牲になり，その凄惨さは筆舌につくすことはできない[79]。それに比べて，日本軍は粗末な旧式の兵器と乏しい弾薬だけであり，空からは間断なく迫撃砲とロケット砲の砲弾の雨が降り注いだ。

早見は本道陣地で，まだ12，3歳の少年兵が攻めて来るのを見て驚いた。銃座の前まで来て泣きながらうろうろする者もおり，「来来（ライライ）々々」と呼ぶと近寄って来るような始末であった。中国軍の背後に米軍将校の督戦隊なるものがいて，このような子供の兵士を無理やり突撃させているように見えた[80]。早見は，捕虜になると助かると思ったのか近寄って来た少年兵から情報を聞き出した後，殺して崖下に投げ捨てた。捕虜を養う余裕は守備隊にはなかった[81]。

武器弾薬の欠乏のなか，やっとの思いで7月15日頃までに中国軍の総攻撃を挫折させたが，雨季による壕の崩壊と中国軍の猛攻撃に苦戦し，守備隊の消耗は激しく，死傷者は600名以上にのぼった。

3–2．日本軍による第2次空中投下作戦

1944年7月15日，第33軍の本多軍司令官は，拉孟守備隊への第2次空中投下作戦を第33軍配属飛行班に発令した。飛行班長の小林憲一中尉は，7月15日から9月9日まで10回の拉孟への空

---

(76) 前掲書『イラワジ会戦』，277頁。
(77) 早見の聞き取り（2005年9月6日）。
(78) 前掲書『イラワジ会戦』，277頁。
(79) 早見前掲書，95頁。
(80) 同上，98頁。
(81) 早見の聞き取り（2005年9月6日）。

中投下を実施した。小林中尉は7月26日の2回目の投下任務の際に，予期せぬ光景を目の当たりにした。以下は小林中尉の陣中日誌からの引用である。

「松山陣地に敷かれたT型布板に向って急降下し，弾薬空中投下に成功した時である。壕から飛び出してきた赤土色の半裸の兵士が狂喜乱舞して喜んでいる姿が目に入ったと同時に，モンペ姿の女性が白い布を打ち振る姿に驚き，目が釘付けになったのだ。[82]」

この女性は拉孟陣地の慰安婦であり，モンペとは軍袴であろう。この頃になると彼女たちは，弾薬を運び，握り飯を作り，兵士と共に戦闘に参加させられていた。

地上にいた早見も戦渦の慰安婦たちの献身的な行動に頭が下がる思いだったと語る。

「あの弾丸の雨が降る中を掻(か)い潜(くぐ)り，飽麺包の空き缶にニギリめしを入れ，二人一組となって守備隊将兵の食事を運んでくれたのが朝鮮人慰安婦の女の人たちでした。[83]」

7月末に入ると，守兵の姿が上空からは見当たらなくなり，拉孟周辺は寂として声もなくなった。木下によると，8月には連合軍機の砲撃が一層激しくなり，守兵は日中壕の中から姿を出すことが困難となった。頼りの壕も崩落し，泥などの堆積土で浅くなり頭を隠すのがやっとだった。[84]

軍事物資の補給が遮断されたのは拉孟守備隊だけではない。騰越(とうえつ)守備隊も同様に全滅の窮地にあった。飛行第64戦隊（加藤隼戦闘隊）に，中国軍の包囲打開のため拉孟，騰越守備隊の物糧投下作戦の任務が与えられた。当時の戦隊長宮辺秀夫の手記に，武器弾薬や食糧以外に「感状」の投下が記されている。感状とは，軍司令官が戦功のあった人間や部隊に付与する賞状であり，当時の日本軍人には最高の誉れであった。しかし守備隊からは「感状など落としてもらわなくてもうよい。それよりも，弾薬を，薬品を，食糧を」と打電してきた，と宮辺の手記にある。[85] この空中投下作戦で，北郷丈夫中隊長が第64戦隊第3中隊として数機を率い，連日の如く出動した。北郷大尉は，1944年9月10日に隼12機を指揮し，騰越守備隊に食糧や軍事物資及び感状を投下した。騰越はその4日後の9月14日に全滅するが，全滅直前の騰越守備隊の敢闘を讃える目的で，本多軍司令官からの最後の感状を投下したのがこの北郷中隊長であった。[86] 任務を果した北郷は，連合軍機の砲弾を受け騰越東南方で爆死した。

7月末に拉孟守備隊にも各軍司令官から相次いで感状の投下があった。公刊戦史には，7月27日に河辺ビルマ方面軍司令官，7月28日に本多第33軍司令官，7月30日に寺内南方軍総司令官から，連日拉孟守備隊に感状が付与され，さらに参謀長から激励電報が打電されたとある。これらを受領した金光守備隊長は，7月30日，第56師団長にあてて，ますます必死敢闘，陣地の確保を誓った

---

(82) 小林憲一（手書き手記）『第33軍（昆集団）配属飛行班の陣中日誌』，5–6頁。
(83) 早見の聞き取り（2005年9月6日）。
(84) 木下の聞き取り（2009年2月13日）。
(85) 龍兵団会長横田忠夫氏より入手（2008年9月27日）。
(86) 昭和19年7月21日に，拉孟守備隊にも手榴弾，薬品の他に感状が投下された。

宣誓の電報を送っている。[87]

しかしながら，戦渦の守兵らは意外にも無感動だった。木下は感状投下について当時の心境を，「軍上層部からの感状投下があったと聞いても，『ああ，そうか』という程度で，緊迫した戦況下では，それほど感動したという記憶はなかった。[88]」と語っている。

感状の付与とは当時の日本軍人には最大の名誉である。名誉を与え守備隊の士気を高揚させることが第一の目的であったが，一方で当時の拉孟の窮状から「全滅もやむなし」と上層部が判断し，感状の投下を決定したとも考えられる。これを裏付ける証拠として，前守備隊長の松井連隊長が7月20日の時点で，拉孟に残した副連隊長眞鍋大尉に，最悪の場合は軍旗を奉焼し，28日には一切の公文書，個人の日記，手紙，典範令に至るまで焼却するように打電命令している。[89] 軍旗は天皇から戴いた最高の軍のシンボルであり「天皇」そのものである。軍旗が拉孟にある限り，軍が拉孟を見捨てるはずがないと全守兵は疑わなかった。[90] 過酷な100日全滅戦闘を支えた精神的な拠り所は軍旗に他ならなかった。その軍旗を奉焼することは，すなわち「全滅」を意味した。

しかしながら，木下は「7月末の時点で軍上層部も自分たちも『玉砕』を認めていたというところまでは行っていなかったと思う」と証言している。[91] 一兵卒の森本謝（ながし）もまた「拉孟守備隊の生き残りの全将兵は，軍旗を守る責任感と，軍旗がある限り拉孟救援にかけつけてくれるに違いないと確信していた。この望みがあったからこそ，死闘につぐ死闘を重ね，陣地を守り続けられたのである。[92]」と記している。拉孟守兵は最後まで救援を固く信じていたが，軍上層部は7月末には「全滅やむなし」と判断した。両者の胸中の相違を「感状」と「軍旗」という日本軍独特の矜持の象徴が隠蔽していたのである。

7月29日，今度は中国軍から投降文が投下された。文面は次のようなものであった。

「日本の皆さん，同じ東洋民族同士で戦いはしないでもよいではないか。もうこのへんで，戦いは止めましょう。そちらも相当な負傷者がいると思う。中国陸軍病院で充分な治療をするから一日も早く投降して来なさい。[93]」

早見は後に捕虜となり，中国陸軍病院で手厚い治療と看護を受けた。捕虜となった日本兵の殆どは充分な治療を受け，無事に日本に送還された。日本軍の形骸化された感状よりも，中国軍の伝単の方が嘘偽りなかった。

---

(87) 前掲書『イラワジ会戦』，278–279頁。
(88) 木下昌巳（2009年2月13日）。
(89) 前掲書『イラワジ会戦』，279頁。
(90) 軍旗があるのは歩兵と騎兵（後の捜索連隊）だけである。兵隊の7割が歩兵で，歩兵は軍隊の主兵と呼ばれた。
(91) 木下昌巳の聞き取り（2009年2月13日）。
(92) 森本前掲書，45頁。
(93) 早見前掲書，102頁。

8 月 3 日，拉孟の副連隊長の眞鍋大尉から松井連隊長に無線が入った。眞鍋大尉は，軍旗を腹に巻き付け，御紋章は地下深く埋め，旗棹は奉焼した。(94)

早見上等兵は，関山陣地で初めて『拉孟の将兵は自決せよ!!』という命令が出たと証言している。しかし，自決命令には兵士全員が反対した。自決命令の数日後に，2 回目の物資投下があったと早見は記憶している。2 回目の空投（7 月 26 日）の数日前となると，7 月下旬頃に少なくとも関山陣地の一部で自決命令が出されていたことになる。7 月下旬から 8 月初めには，軍上層部と守備隊の幹部の間では「全滅やむなし」と決断され，「拉孟の始末」が思案されたのである。

横股陣地にいた木下少尉は，「投下された梱包の回収は極めて困難であった」と証言している。小さな落下傘が開かずに土煙を上げて地面に激突することもあった。落下傘が開いても陣地内が狭いので，大部分が陣地内に着地せずに，敵前回収しなければならなかった。中国兵と奪い合う場面もあり，入手できたのは投下物の半分程度であった。決死の覚悟で回収した梱包の中には，飛行隊心づくしのキャラメルや小銃弾や手榴弾が入っていた。(95)

ところが，飛行部隊による投下物資には，武器弾薬や食糧以外に「意外な物品」が含まれていた。重慶の英国大使館の軍事補佐官から大使館付武官へ送られた，8 月 27 日付の書簡の中に，「日本軍の投下物にはセルロイド人形や紙製の扇子などが入っていた」と記されている。(96) 同様に，米軍史料にも日本軍の飛行隊が投下した「慰問袋（comfort bag)」の中に，「口紅や小さな人形や綿製の女性の洋服が入っていた」との記述がある。(97)

「慰問袋」とは，特定の兵隊を対象としたものではない為，女性の匂いのするものを入れた可能性は否定できない。戦地への「慰問袋」は後方担当の軍人の管轄であり，彼らは慰安所とも関係が深い。そのような後方担当の将兵の計らいで，口紅や洋服や人形などが内地ではなく，戦地で追加された可能性も否めない。運よく投下が成功すれば，慰安婦らの手に届き，最終的に将兵の士気高揚につながると考えたのだろうか。武器弾薬や食糧と共に，口紅や人形などが投下物資に含まれていたことで，日本軍が慰安所を重要視していた一つの証拠を提供している。だが，実際に物資を投下した飛行班長小林中尉も，拉孟陣地でそれを回収した木下少尉も，2 人共に口を揃えて「口紅や人形のことは知らない」と証言している。(98)

その後，小林中尉の第 33 軍配属飛行班は，地上作戦協力が事実上不可能と判断され，10 月 29 日，その所属が解かれビルマ方面軍の指揮下に置かれた。この時，第 33 軍司令官本多政材中将より飛行班に賞詞が授与された。賞詞の文面は辻政信大佐の筆によるものであった。(99)「作戦の神様」との異

---

(94) 前掲書『イラワジ会戦』，279 頁。

(95) 木下前掲書『玉砕』，53–54 頁。

(96) *Kunming Monthly News Summary for August*, 1944, p.104.

(97) *US Office of War Information*, National Archives and Records Administration, Report No.49: Japanese Prisoners of War Interrogation on Prostitution.

(98) 小林の聞き取り（2004 年 7 月 27 日），木下の聞き取り（2003 年 5 月 16 日）。

名をもつ辻政信高級参謀が第33軍に着任したのは，1944年6月下旬であった。辻発案の「断作戦」の発動を9月3日に控えていたため，拉孟陣地の3ヶ月間の死守は「断作戦」発動の絶対必要条件であった。それ故，小林中尉らの飛行班による空中補給は拉孟を死守するための重大任務であったが，小林は空中投下作戦中に，「拉孟守備隊を救出してやる予備兵力はない。もう全滅するしかない。」と直接辻参謀の口から聞かされていた。(100)

4. 連合軍による第3次攻撃（1944年7月20日から9月7日）

4–1．本道陣地陥落

7月20日，中国軍は本道陣地に猛攻撃を開始した。幅約2百メートル，長さ約5百メートルほどの狭い本道陣地に対して，砲弾が7，8千発も終日撃ち込まれた。7月25日夕刻，本道陣地の西側の半分が中国軍へ渡ったが，夜襲により奪回した。(101) 7月26日，ふたたび集中砲撃後，火炎放射器で武装した中国兵と壕内で壮絶な白兵戦が展開されたが，ついに力尽きて本道陣地西半分が占領された。早見上等兵は陥落寸前の本道陣地から，本道後方の山崎台に後退した。早見は，「壕の中は膝まで泥でぬかるんでおって，敵の砲弾がすごくて頭を出すこともできんから，用便をするのも砲弾の空き缶にして壕の外に放り出す有様だった。」と毎日降り続く雨の中での壕暮らしの酷さを語った。(102)

公刊戦史には，「7月下旬に，本道陣地の攻防戦以外に，横股，松山，関山，裏山の各陣地に対しても，次第に強圧され，兵力の大部分を本道に送ったこれらの陣地は，わずかの残存兵力で苦戦した」(103) と短く記されていて各陣地の戦闘の詳細は分らない。そこで裏山陣地の攻防戦の様子を森本謝（ながし）上等兵の手記から見てみよう。裏山陣地には只松茂大尉が指揮する150名の守備兵がいたが，裏山が危ないとの報を受けて，森本上等兵のいる安河内正幸少尉の予備隊は，裏山救援に駆けつけた。安河内予備隊は，陣地の壕内に安置した多数の戦死者を裏山の窪地に集め，夜になって屍体を秘かに涙ながらに火葬した。7月下旬はまだ拉孟でも火葬ができる余裕があった。森本は，この頃戦死した戦友の氏名さえ覚えていない。明日をも知れぬわが身には，その必要はなかったからである。(104) 壕内は屍体と傷ついた多数の将兵で充満していた。食事も寝ることもできず，雨季の雨でずぶ濡れになりながら寒さとも戦わなければならなかった。戦況が全く分からないなか，次第に森本上等兵の心も変化した。

「戦争というものは，人間の感情を麻痺，鈍化させ，死という恐怖心や人間性も，何もかも亡くさせてしまうものである。…このように無感覚になった将兵には，笑いも怒ることもなかっ

(99) 小林憲一（手書き手記）「戦陣紀行　壮烈!!　拉孟守備隊」，32頁。
(100) 小林の聞き取り（2004年7月27日）。
(101) 木下前掲書『玉砕』，61頁。
(102) 早見の聞き取り（2005年9月6日）。
(103) 前掲書『イラワジ会戦』，278頁。
(104) 森本前掲書，44頁。

た。あるのは，食うことと寝ること，そして敵を刺し殺すことだけである。戦友が戦死しても，段々と何の感傷もなくなってゆく気がした。」[105]

森本は，最初は泣きながらやっていた戦友の死体を陣地の窪地に運ぶ作業も，ただ惰性でやるようになった。7 月 28 日，全陣地の守兵は，傷病兵を入れて約 300 数十名であった。

8 月 2 日，中国兵は本道陣地西半分を壕伝いに火炎放射器で焼失した。武器を持たぬ拉孟守兵は，中国兵の手榴弾を投げ返しながら必死の攻防戦を繰り返した。中国兵も黄色い声を張り上げて勇敢に突入し，若い中国兵の中には半ベソをかいている者もいた。拉孟守兵は死闘の末，500 名余りの犠牲を払い本道陣地は陥落した。しかも連日の雨と砲爆撃によって陣地は破壊され，給水設備も用をなさない。そのため泥水をすするので，守兵はみなアメーバー赤痢やマラリアに苦しめられていた。さらに，野菜不足から脚気が続出し，歩行が困難となる者も大勢いた。[106] 守備隊の疲労困憊は極限状態にあった。7 月末のこの頃に各軍司令官から拉孟陣地へ激励電や感状が続々と届いたが，もはや戦勢を挽回するだけの戦力は守備隊には残っていなかった。

4–2．脱出命令

8 月中旬頃，金光守備隊長は，横股の木下昌巳中尉を音部山本部に呼んで，木下には思いもよらぬ命令を下した。[107]

「今日，貴官を呼んだのは他でもない。知っての通り本道陣地は占領されて，残るは主陣地だけだ。師団長本部から『断作戦』が発動され，まず拉孟を救出して，続いて騰越を救出する計画だから 9 月まで持久せよ，との命令を受けたが，本道陣地が陥落した現在ではとてもそこまで持ちこたえられないと思う。守備隊最後の場合には，貴官は陣地を脱出して，龍陵の師団司令部に戦況報告に行ってもらいたい。」

木下中尉はこの命令だけは承諾できなかった。第 7 中隊長として死ぬと分っている部下を残して自分だけ脱出できない。また，拉孟に来てまだ半年足らずで地理にも疎く，四方を中国軍に包囲されたなか，龍陵の師団司令部に辿り着ける自信がなかった。

金光守備隊長はじっと木下中尉を見つめていたが，しばらくして口を開いた。

「貴官の気持はよく分かる。だが，ここで全員が死んでしまったら，長い間の守備隊の苦労が師団に分ってもらえないではないか。しかも戦死した将兵の遺族に対して，誰がこの状況を伝えてくれるのか。…それから後世に対しても，子々孫々に至るまで拉孟の戦闘の模様を伝えなければならない義務があると思うが。」と岡山弁訛で諭すように言われ，「さらにもし内地に帰る機会があれば戦死した将兵の遺族にも戦闘の模様を伝えてもらいたい。それから脱出する時には，1，2 名伝令を連れて行け。」[108]

---

(105) 同上，49 頁。
(106) 木下前掲書『玉砕』，75 頁。
(107) 8 月 1 日に，陸士第 56 期生は急きょ中尉昇進の命を受け，木下昌巳も中尉に昇進した。

木下中尉はもはや断ることができなかった。

4–3．関山陣地爆破

本道陣地陥落，中国軍の次なる標的は関山陣地である。関山を死守しているのは，歩兵第 4 中隊の辻義夫大尉である。彼は中学校の国漢の教師で文学に造詣が深く，兵隊詩人と呼ばれ絵画も嗜（たしな）んだ。辻大尉は，再三の防衛戦闘では実に勇敢に闘い，部下からの人望も非常に厚い隊長であった。かつて水木洋子を接遇した将校が辻大尉である。関山陣地の辻大尉以下の抵抗があまりに激しく，中国軍もなかなか攻撃が進展しなかった。そこで中国軍は地中に坑道を掘り，地下から関山陣地を爆破する計画に出た。米軍史料によると，8 月 11 日から中国軍は坑道を掘り始め，日本軍のトーチカの下を約 22 フィート（約 67 メートル）掘り進めた。その後，ある坑道に TNT 火薬を 2500 ポンド，別の坑道に火薬 3000 ポンドを装着したとある。[109] 中国軍に対抗して，関山陣地からも反対側から坑道を掘り始めたが，日本軍は兵力不足で作業が進まなかった。8 月 20 日の午前中に中国軍は坑道の奥，2 箇所に装着した火薬を爆破させた。

森本謝（ながし）上等兵の安河内予備隊は，関山陣地の救援に出動したが，陣地に到着するや否や，中国兵との白兵戦になった。安河内予備隊の原隊は関山陣地の第 4 中隊であった。森本は，本来は辻中隊長の関山守備兵であった。関山陣地は，森本らが 2 年前に汗を流して構築した主陣地の一つであるが，連日の連合軍の空爆と砲撃で見るも無残な姿になっていた。白昼は中国軍に関山は奪取されるが，関山守備兵と安河内小隊は，夜襲により陣地を奪回した。予備隊は救援につぐ救援で，各陣地で死闘を展開したが，戦闘中は誰が指揮官かも分からないほど混戦していた。関山の戦闘中も辻中隊長にも会うことはできず，「わが中隊でありながら，そこに誰がいて誰がいなかったのか，今になっても記憶が甦らない。余りに熾烈（しれつ）な戦いの連続であったがために思い出せないのである。」[110] と森本は記している。

公刊戦史にあるように，各陣地では中隊長の陣頭指揮で戦闘が展開したのではなかった。木下中尉自身も，「少なくとも 100 日全滅戦闘が始まってからは，白兵戦ばかりで混戦し，指揮官の命令で戦うことなどできなかった。」[111] と述べている。

関山で早見上等兵は，中国軍が坑道を掘る不気味な音を聞いた。

「足元からチャンチャン音がするのよ。中国軍が下を掘って来るぞって逃げたんよ。関山は焼き尽くされてね。16 体の死体があって，腹をやられた戦友の便が出なくなるので，尻の穴に指を突っ込んで出してやったな。ハーッと言って気持良くなって死んでいった。まさに地獄だよ。」[112]

---

(108) 木下前掲書『玉砕』，74–78 頁を参照。

(109) *US Army in World War II The China-Burma-India Theater Stillwell's Command Problems Part.*

(110) 森本前掲書，47 頁。

(111) 木下の聞き取り（2009 年 2 月 13 日）。

(112) 早見の聞き取り（2005 年 9 月 6 日）。

この頃，早見上等兵は眞鍋大尉の伝令兵となっていた。最初の伝令の任務は，中国軍陣地に宣伝ビラを撒くことだった。ビラには大砲の絵が描かれ，撃つのは米兵で，砲弾が中国兵の姿である。このビラを20枚位ずつ，石ころを中に入れてしばり，中国陣地に投げ込むのだ。[113] ちなみに連合軍は空中から軍機で大量に撒くから散布できる量と範囲のケタが違った。早見は伝令兵としてあちこちの陣地を回っていたので戦闘の全体像を一兵隊ながらよく知っていた。予備隊として各陣地の救援に駆り出された安河内小隊の森本上等兵も同様であった。

8月20日の午前9時頃（公刊戦史では11時）に，坑道の奥にTNT火薬3千キログラムを2ヶ所に装填（そうてん）して爆破された。[114] 公刊戦史には「突如地下三ヶ所から大爆発が起こった」[115]とあるが，先の米軍の史料にも，火薬は坑道の2ヶ所に装填したとある。関山陣地から黒煙が立ちこめ，火炎放射器を持った中国兵が関山陣地に突入した。夜襲奪回の甲斐もなく，22日払暁に関山は陥落した。

公刊戦史には，8月23日午後5時，金光守備隊長が関山陥落の状況を，松山師団長に打電した金光電531号が残されている。[116] 戦況報告と共に「最悪の場合各種報告のため砲兵隊木下昌巳中尉を脱出報告せしむ。同中尉は守備隊本部にありて戦闘に参加し戦況を熟知し唯一の無傷年少気鋭の将校なり」と加えた。脱出後，無事到着した木下中尉は龍陵の師団司令部で，この電文を読むことになる。金光守備隊長が木下昌巳中尉を選抜した理由は定かでない。木下は，「守備隊長と私は，時期的に接触の時期が短かったのに，特に私を選定された真意の程は不明であるが，信用して頂いたことには感謝の気持で一杯である」[117]と語っている。

4–4．音部山陣地陥落

8月23日頃になると弾薬や食糧はほとんど尽き果て，脚気，アメーバー赤痢患者が続出し，残存兵力200名余の大半は体力を消耗し歩行すら困難な状況となった。8月29日，関山から攻撃してきた中国軍により，ついに守備隊本部のある音部山も占領された。[118]

木下中尉の手記には，8月28日に最後の食料が分配されたと記されている。砲撃で破壊された糧秣倉庫の残骸からかき集めた食料が生存者に配られた。わずかに乾麺包1袋，牛缶2缶が各人に配給され，飲料水は天幕に溜まった雨水や弾痕に溜まった泥水を啜った。僅かばかりの配給食糧を食い延ばして戦えと言われても，空腹が我慢出来なかった。木下中尉は配給食糧を2日で食べ尽し，後は十数粒の金平糖だけ手元に残した。この時は，死ぬまでにもう一度腹一杯飯を食べたいという思いだけであった。[119]

---

(113) 早見前掲書，102頁。
(114) 木下前掲書，86頁。
(115) 前掲書『イラワジ会戦』，281頁。
(116) 同上。
(117) 木下の聞き取り（2002年12月6日）。
(118) 前掲書『雲南方面の作戦』，153頁。
(119) 木下前掲書，88頁。

9 月 4 日，木下中尉は最後の砦となった横股陣地の壕の中の様子を手記に書いている。各陣地からの残存兵が集まっており，豪内は重傷患者で溢れていた。彼らは火砲の掩体内に身を横たえ，うめき声にまじって，「水をくれ」「手榴弾をくれ」と最後の声をしぼり出しながら喘いでいた。重傷の兵に混じり兵隊の服を着た女らしい姿が 2，3 人いる。20 人の慰安婦の何人かだろう。守備隊本部の松崎軍医は守備隊長から命を受けた自決用の昇汞（塩化水銀）の包みを皆にいつ渡そうかと思い悩んでいた。[120] 拉孟の最後では片足でも動けるものは戦闘で果て，傷病で動けぬものは塩化水銀の服飲や手榴弾で自決した。陣地周囲の塹壕は，今では腰までの深さもないくらいに無残に崩壊し，戦死者の死体もそのまま放置され，ゴムまりのように膨らんだ屍体の傷口には，蛆が真っ白くかたまって蠢いていた。[121]

9 月 5 日，西山陣地は包囲され，一時裏山，横股陣地とも連絡不能になり，拉孟陣地最後の時が迫る。金光大隊長は，守備隊最後の報告を打電し，師団司令部に決別を告げた。[122]

この後すぐに，大隊長は無線機を破壊した。眞鍋大尉はこの時すでに菊の紋章と旗棹を，音部山と西山の中間の松林に埋めていた。軍旗は大尉の腹に巻かれ，いよいよ最後の時を迎える。[123]

5. 小括

木下昌巳中尉は拉孟全滅戦闘に関して，「私自身拉孟に来たのが 1944 年 4 月であり，半年後に玉砕となったので，私の知り得る事実は私の部隊のことだけであり，それ以外は自分が見たわけではないので話すことが難しい」[124] と語っている。これは木下の正直な思いであろう。事実，指揮系統が混乱した全滅戦闘では，将校といえども他の陣地の様子は全く把握できていなかった。木下中尉が体験した全滅戦闘とは，横股陣地の第 7 中隊の一中隊長として知り得る限りの内容である。公刊戦史の拉孟全滅戦は，師団司令部と金光守備隊長の無線交信記録を主体に最後まで勇戦し，華々しく散った拉孟守備隊を念頭に書かれており，必ずしも木下の証言が反映されたものではなかった。さらに，木下は「『玉砕』戦闘なんて決して格好いいものではなかった」と結んでいる。

早見正則上等兵の証言は，兵隊の目線で見たありのままの拉孟全滅戦闘の実態を明らかにする，まさに「兵士のレベルまで降りた」戦闘記録である。副連隊長眞鍋大尉の伝令兵として陣地を歩き回っていた早見ならではの貴重な証言が幾つもある。また，拉孟陣地脱出後の早見の中国隊商襲撃の証言は，中国史料の裏づけも取れ，今まで分らなかった史実が明らかになった。[125]

---

(120) 木下前掲書『玉砕』，96–97 頁。
(121) 木下昌巳「拉孟守備隊玉砕記」，273 頁（出口範樹編『悲劇の戦場　ビルマ戦記』潮書房，1988 年所収）。
(122) 前掲書『イラワジ会戦』，282 頁。
(123) 前掲書『イラワジ会戦』，282–283 頁。
(124) 木下昌巳の聞き取り（2006 年 11 月）。
(125)〈後編〉第 2 節第 2 項を参照。

一般的に公刊戦史と呼ばれる戦史や戦記の類は，各々の師団や連隊の「功績」を記載し，全滅戦などの悲惨な戦闘においても戦死者を「美化」する傾向があるのは否めない。公刊戦史『イラワジ会戦』の中での拉孟守備隊の全滅戦闘に関する記載もまた，「拉孟守備隊の勇戦と玉砕」という題名にあるように，凄惨極まりない戦闘の内実を勇戦や玉砕という美辞で覆い隠して，最後は有終の美を飾って「感状」の付与で締め括られている。

6 月 2 日に戦闘が開始され，早くも 6 月下旬には武器弾薬の底も尽き果て，拉孟守備隊はすでに劣勢であった。にもかかわらず，公刊戦史には「6 月 20 日ごろには完全に中国軍の攻勢を挫折させた」と記されている。6 月 28 日に日本軍飛行隊によって敢行された初の空中投下作戦は，その犠牲の大きさに反して実際に拉孟守兵の手元に届いた弾薬等は一日の攻撃分にも満たなかった。公刊戦史では，物質的な効果よりも士気高揚の精神的効果が高く評価されているが，これは軍上層部の思考が反映されているにすぎない。日本軍機を目の当たりにして守兵らは大いに歓喜したが，それもつかぬ間で，最悪の戦況下の武器弾薬不足は精神論だけではもはや解決できなかった。軍人の矜持を鼓舞する感状投下に至っては，軍司令部が予想したような士気高揚とはならずに，守兵の反応は意外にもクールであった。飛行隊による命がけの空中投下物資の中身に，女性用の口紅やワンピースや人形が混載されていた。日本軍史料にはこうした都合の悪い史実は記載されておらず，この事実は全て連合軍史料から明らかとなった。このように，公刊戦史の拉孟全滅戦闘の記載は，軍上層部側から見た「玉砕」戦闘としてあるべき姿の，勇戦敢闘を前面に謳った内容であり，実際に戦場にいた拉孟守兵らの現実の戦闘の悲惨で非人間的な姿を必ずしも正確に表しているとは言い難い。

さらに，軍上層部と拉孟守兵の間には深刻な心理的な乖離があった。7 月下旬には軍上層部は，拉孟守兵の「全滅やむなし」と決断していたのだ。ビルマ方面軍，第 33 軍，南方軍の各軍司令官からの感状投下は，拉孟守兵に対する最後の餞であった。しかし一方で，守兵らは，軍旗を心の拠り所にして師団主力の救援を信じて拉孟を死守した。拉孟守備隊の全滅が，断作戦発動（9 月 3 日）の 1 ヶ月以上前に決まっていたとするならば，拉孟はビルマルート遮断の「最後の砦」ではなかったと言わざるをえない。では，拉孟守備隊はなぜ全滅しなくてはならなかったのか。拉孟全滅戦には 1300 名の生命を失わせるだけの意味が見出せないことが，拉孟全滅戦闘の意味を的確に表している。最終的に，拉孟は師団主力が北ビルマおよび雲南地区から撤退するための捨石となったのである。

（神田外語大学非常勤講師）